

## 上海聖三一堂の歴史の変遷

—19世紀半ばから現代まで—

村上志保

### はじめに

2004年、上海市の中でも特に中心にあたる黄浦区に、新たな教会堂が一つ増えることになった。それは教会堂の新たな建設という形ではなく、長期間にわたって黄浦区政府に接収されていた聖三一堂の返還という形で実現した。聖三一堂の前身は、イギリス人を中心に租界在住の外国人に対してのみ開かれていた英国聖公会の教会堂であり、上海における最初の正式な教会建築物として1847年に建てられた教会堂である。現在残っている建物は、1869年に大聖堂として改築した際のものであり、上海市内では最も古い教会堂建築である。

聖三一堂は中華人民共和国建国以降様々な変化に直面したが、文化大革命（以下、文革）時に黄浦区政府に接収されて以降2004年にいたるまで、急激に変化していった上海という都市の中で約40年もの長きにわたりひっそりと埋もれるよう黄浦区政府の大講堂として存在していた。それが2004年に返還されて以降、大規模な修復工事が行われ、上海プロテスタントのシンボリックな教会堂として、そして上海の歴史的景観を残すランドマークのひとつとして復活を遂げたのである。聖三一堂が

経てきた歴史の変遷は、近代から現代にいたる上海プロテスタント教会史と密接に関わり、今もなお変化の途上にある。

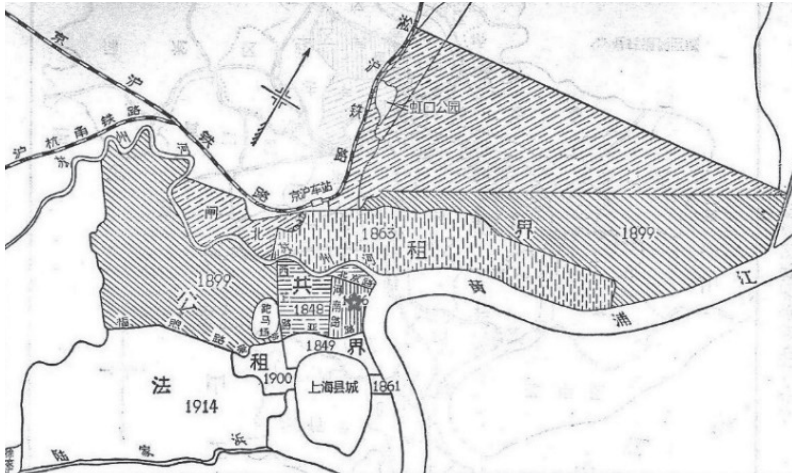
本稿では、この聖三一堂に焦点を当て、租界時代から現代にいたるまでの聖三一堂の歴史的盛衰と復活の変遷を考察する。さらにそれを通して上海という、租界時代から現在まで激動を経験してきた大都市において、いかなる政治的、宗教的、社会的状況がプロテスタントの教会堂の変化に関わってきたのかを明らかにしたい。本稿では主に中華聖公会などの教会刊行物、筆者によるフィールド調査、さらに2016年秋に出版されたばかりであり、上海プロテスタント史について貴重な証言が多く収録されている『曹聖潔口述史』に基づき論考を行う。

## 1. 租界時代における聖三一堂

### 1-1. 租界の形成と聖三一堂

上海において教会堂の歴史は、イギリス、フランス、アメリカが中心となって形成した租界の誕生と共に始まった<sup>(1)</sup>。租界は、上海県城という伝統的な都市の外側に形成された近代都市空間であり、租界形成当初は中国人に対して排他的な空間であった。南京条約により上海が開港した1843年には、イギリス会衆派のロンドン伝道会の宣教師メドハースト（Walter Henry Medhurst）らによって上海で最初の伝道所が開かれた。その伝道所は上海県の中心都市であった上海県城内にあった住居を借りたもので、そこで礼拝と伝道が行われた。これが上海においてプロテスタントの伝道所が出現した最初であったが、その後中華人民共和国が建国されるまでの約100年の間に、多くの海外伝道団が上海に本部を構え、教会堂だけではなく学校や病院、出版局を設立した。プロテスタントに限れば、上海には1949年当時租界内外に約200か所以上の教会堂があった。同時期における北京での教会堂数が65か所であっ

## 上海聖三一堂の歴史の変遷



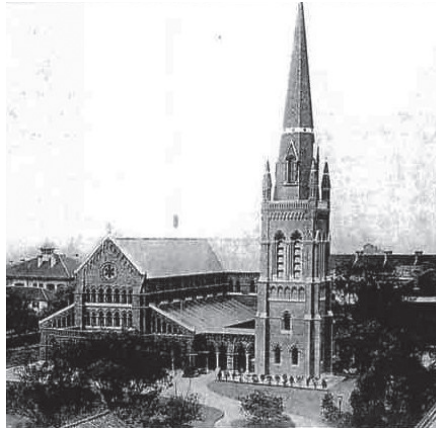
【地図1】上海租界地図。星印が聖三一堂の位置。

出所：蒯世勛『上海史資料叢刊：上海公共租界史稿』人民出版社，1979年をもとに筆者作成。

たのと比較すれば、いかに上海において教会堂が突出して多かったのが伺われる。

上海における最初の正式な教会堂建築物として、英国聖公会によって建てられたのが聖三一堂である。聖三一堂は英語名を Holy Trinity Church と言い 1847 年に落成した<sup>(2)</sup>。その位置は最初にイギリス租界ができた区域のほぼ中心にあたる【地図1】。聖三一堂は、中国での伝道を目的として建てられたのではなく、英国領事館員はじめ当時約 100 名いた上海在住のイギリス人の礼拝のために建てられた教会堂であり<sup>(3)</sup>、日本による上海爆撃（第二次上海事変）によって教会堂を失った中国人聖公会信者を受け入れるようになる 1937 年まで、約 90 年間にわたり主にイギリス人などの租界在住の外国人にのみ開かれた教会堂であった。

1869 年に聖三一堂の建物は大聖堂として改築されるが<sup>(4)</sup>【写真1】、



【写真 1】 1869 に大聖堂として改築された聖三一堂

出所：Alan Balfour, “Twin Cities,” in Alan Balfour & Shiling Zheng, eds., *Shanghai (World cities series)*, Wiley-Academy, 2002, p.68.

その建築様式は、典型的な西洋教会建築様式の一つであるゴシック式であった。その時に建造された教会堂は現在も残り、租界の最盛期の景観を今に伝えている。1893 年になると聖堂の東南にゴシック式の鐘楼が建てられ、さらに 1918 年には極東で最大と言われたパイプオルガンが設置された<sup>(5)</sup>。聖三一堂は 1875 年には英国聖公会華北教区主教座堂に格上げされ、その管理権はカンタベリー大主教に属した<sup>(6)</sup>。さらに 1887 年には、ヴィクトリア女王在位 50 周年を祝う記念礼拝が聖三一堂において盛大に執り行われるなど<sup>(7)</sup>、その立地点、建物の規模、そしてその位置づけや機能などによって、聖三一堂は英国聖公会およびその母国イギリスの権威を象徴する教会堂であったと言える。

一方英国聖公会は、中国人を対象とした伝道所も同時期に開設しており、1844 年には南京路に中国人を対象とした最初の伝道所を開設している。この伝道所はその後上海県城内の石皮弄に移り、福音堂という名で新たに開設された。福音堂はその後も長期にわたり教会堂を何度も移

転したり、墓地併設の礼拝堂を間借りしたりする状態が続いていた。この状況の解決に対して英国聖公会は協力的ではなかったため、中国人教会員たちは、1902年に聖保羅堂（「保羅」は「パウロ」の中国語表記）という教会堂名を正式に決定し、中国人信者による資金のみによる教会堂建設を目指しはじめた。その間1909年に教会の帰属先が英国聖公会から米国聖公会に教会員の同意を得ずに変更されるという出来事がありながらも、長年の資金準備と苦労を重ねて1924年について閩北地区での建堂を達成した<sup>(8)</sup>。この聖保羅堂は元来同じ英国聖公会による教会堂とはいえ、中国社会への土着化という点においては聖三一堂とは完全に対極的であったが、のちに聖三一堂とは浅からぬ関わりを持つことになる。

## 1-2. 教会の中国化の中での聖三一堂

ここで中国および上海における聖公会の伝道活動について概観しておこう。英国聖公会は、1844年から上海において宣教活動を始めるが、教区は浙江省に置かれ、上海は浙江教区に属していた。米国聖公会もほぼ同時期である1845年以降上海において伝道活動を開始し、江蘇省に教区を置くが、米国聖公会においては、上海は江蘇教区に属していた。その他聖公会系ではイギリスのもう一つの団体である英国行教会（英語では Society for the Propagation of the Gospel）およびカナダ聖公会が中国での伝道を開始するが、上海で活動していたのは主に英国聖公会と米国聖公会であった。上海における英国聖公会による教会堂は、聖三一堂以外に前出の聖保羅堂があった。米国聖公会による教会堂は主なものとしては虹口救主堂、聖彼得堂（「彼得」は「ペテロ」の中国語表記）、そして今もその建物が残る諸聖堂などがあった。特に上海において最も活発に活動し、少なからぬ影響を与えたのは米国聖公会である。とりわけ中国人への教育に力を入れ多くの知識人や神学者、宗教リーダーを輩

出した有名な聖約翰大学（「約翰」は「ヨハネ」の中国語表記）はじめ上海に数々の名門校を設立し、その後の中国プロテスタント界における多くの中国人指導者を輩出した<sup>(9)</sup>。

1900年代に入り、中国人聖職者、信者の成長が顕著となる中で、中国国内の教会の海外伝道団からの自立化の模索が本格的に始まる。さらに1910年のエディンバラ世界宣教会議でのエキュメニカル運動の発展により、各教派の合同・協力へと向かう潮流が形成された。中国国内で活動していた聖公会ではこの流れに対応し、イギリスからの聖公会系の二団体に加え米国聖公会、カナダ聖公会が中国で開いた11の主教区を統合して1912年に中華聖公会を設立した。

さらに1920年代以降、愛国主義と反帝国主義の高まりによって「帝国主義国の手先」としてキリスト教に対する批判が強まる中で、19世紀後半から模索され始めていた海外伝道団からの教会の自立および中国化が当時のプロテスタント諸教会諸教派の中心的課題となった<sup>(10)</sup>。その流れにおいて、1922年5月に上海において第五回基督教全国大会が開催された際に、諸教派および諸教会の合同の全国組織として「中華全国基督教協進会」が設立され上海に本部が置かれた。この組織は、1920年代以降高まった教会の中国化、土着化を目指す教会運動の中心となった。さらに1927年には中国人を主体とした中国の合同の教会として「中華基督教会」<sup>(11)</sup>が設立された。この中華基督教会は、長老会、公理会、ロンドン伝道会など主に長老制を採用している教会を合併して設立されたが<sup>(12)</sup>、中華聖公会はそれには加わらなかった。

1920年代以降の愛国主義、反帝国主義の新たな潮流の中においても、聖三一堂はその位置づけを変えることはなく、中国社会、中国人信徒にさらに寄り添うという方向性をとることはなかった。中華聖公会は、1930年にロンドンで開催されたランベス会議（10年に一度カンタベリー大主教の招きにおいて開催される全世界の聖公会主教の会議）において



正式に独立の教区として承認されたが、その後も聖三一堂の教政管轄権は依然としてカンタベリー大主教にあり、大主教の委託によって浙江の英国籍の主教が代理で管轄することになっていた<sup>(13)</sup>。この決定について、中華聖公会の機関紙である『聖工』では、「聖公会の教政原則においては（中略）、正式に組織された教会省区の中に、異なる区や国の主権が侵入することは認められず、また、一つの省区における教会の主教が他の教区に対して教政権を拡大することも認められない。中華聖公会江蘇教区の上海の一座堂が、イギリス聖公会の大主教によって管轄されることも、あるいは大主教が委託した浙江区の英国籍主教によって代理管轄されることも完全に不合理である」と強く批判する記事を掲載している<sup>(14)</sup>。

一方、英国聖公会によって設立された聖保羅堂や聖彼得堂、米国聖公会による虹口救主堂などは、専属の中国人牧師やそのもとにある信者たちの自立を求める強い意志によって、中国人の資金のみによる教会堂の設立（聖保羅堂<sup>(15)</sup>、虹口救主堂<sup>(16)</sup>）や経済的自立（聖彼得堂）などを達成していた。これらの動きの中で見ると、聖三一堂のみが極めて特殊な位置づけにあり続け、教会堂の門戸を中国人に対して閉ざしたままであったことがわかる。しかしながら、1930年代以降の日本軍の上海への侵攻によって租界をめぐる環境が急変してゆくなかで、聖三一堂もついに大きな変化を余儀なくされた。その発端となったのが1937年の第二次上海事変における閘北や虹口等への日本軍による爆撃である。その際に聖保羅堂、救主堂は戦火で破壊されてしまった<sup>(17)</sup>。そのため、教会堂を失った聖保羅堂の信者たちは、聖三一堂を間借りして礼拝活動を行うことになった。それによって、長年外国人専用であった聖三一堂は、初めて教会員として中国人信者を受け入れるという大きな変化を余儀なくされたのである。しかしこの変化は始まりに過ぎなかった。1930年代後半にいたり初めての転機を迎えた聖三一堂は、その後1949年にお

ける共産党政権成立に伴う外国人宣教師の強制退去や、教会の統廃合により、さらなる変化を迎えることになったのである。

## 2. 中華人民共和国建国後の聖三一堂

### 2-1. 共産党政権成立後の宗教状況の変化

中華人民共和国になって以降のプロテスタント教会の状況および変遷についてはすでに多くのすぐれた研究論文が上梓されている。本稿では紙面の関係から共産党政権成立後のプロテスタント教会をめぐる状況については簡単に触れるにとどめ<sup>(18)</sup>、1949年の建国から1950年代後半にかけての聖公会の動きについて、聖三一堂をめぐる状況を中心に考察する。

共産党政権の成立は、キリスト教はじめすべての宗教あるいは伝統の宗教的習慣をめぐる環境を大きく変化させた。共産党政府は、法律上宗教信仰は自由であるとしながらも、宗教の活動を制限する政策を実行する。その中で宗教として正式に認められたのは、仏教、イスラーム、カトリック、プロテスタント、道教の五宗教である。これらの宗教は、共産党政府の下でそれぞれ愛国的宗教組織（中国語では「愛国宗教組織」）を結成し、共産党政権下の宗教として再組織化されることになった。仏教、イスラーム、カトリック、道教の愛国的宗教組織の本部は北京に置かれたが、プロテスタントのみ現在にいたるまで上海に本部を置いている。

プロテスタントの愛国的宗教組織は中国基督教三自愛国運動委員会（以下、三自委員会。1954年における正式な設立までは「三自愛国運動委員会準備会」）であり、各教派、教会は三自委員会の指導の下で再組織化され共産党への支持と愛国主義を積極的に示すことが求められた。特にカトリックとプロテスタントに求められたのは、「欧米帝国主義国」



との関係の徹底的な断絶であった。そのため1951年に海外伝道団は国外強制退去となり、それ以降海外のキリスト教界やバチカンとの交流は制限され、現在にいたるまで外国人の中国国内での伝道活動は非合法となっている。その中で聖三一堂は、その名称は変わらなくともそれまでの聖三一堂とは大きく異なるものへと変化していったのである。

聖三一堂における最初の変化は、日中戦争終結後まもなく勃発した国共内戦が共産党による勝利へと向かい、共産主義国家の建国が近づくなかで起きた。当時上海に居住していた外国人たちの多くが上海からの退去を始めたが、1948年にカンタベリー大主教は、初めてこの教会堂の教政権を中華聖公会の江蘇教区の主教に移管することに同意した<sup>(19)</sup>。その後も聖三一堂の行政権と財産権は租界在住のイギリス人が掌握していたが、1950年春には租界のイギリス人たちは地産税を負担できなくなり、教会堂の財産権を当時の上海市人民政府に譲渡した。人民政府はいったんそれを三自委員会の前身である中国基督教三自愛国運動委員会準備会に渡したが、準備会はさらにそれを中華聖公会へと渡した<sup>(20)</sup>。聖三一堂では1937年以降聖保羅堂の信者たちが間借りの状態で礼拝を行っていたが、それ以降彼らは正式に聖三一堂所属の教会員となった。100年以上もの長きにわたり上海においてイギリスの教会堂であり続けた聖三一堂は、ついに中国人信者に属するものとなったのである。

1951年における海外伝道団の強制退去以降、聖三一堂はじめ国内のすべての教会および教会堂は、自動的に自立および中国化を達成することになったが、同時に共産党政権との関係、三自委員会に加わるか否かという新たな課題に直面することになった。当時中国に存在していた諸教派および諸教会は、それぞれが三自委員会の傘下に加わるか否かの決断を迫られたが、信仰の立場などからそれを拒否した教会やその指導者は、その後弾圧の対象となった<sup>(21)</sup>。一方、当初から積極的に三自委員会に参加していったのが欧米ミッション由来の教会である中華聖公会や

中華基督教会などのミッション・チャーチであった。さらに Xu（徐以樺）によれば、YMCA やニューヨークの協和神学院とともに中華聖公会はミッション・チャーチが三自委員会に接合してゆく結節点の一つであった<sup>(22)</sup>。しかしそれらミッション・チャーチの各教派にしても三自委員会に加わり、愛国主義と共産党への支持を掲げることに同意しても、自らの教派を捨てることになるとは考えていなかったようである。これは 1950 年代における聖三一堂をめぐる聖公会の動きをみると明らかである。

## 2-2. 教派の廃止まで

三自委員会が正式に成立した翌年である 1955 年 1 月、中華聖公会は総議会常務委員会を開き、聖三一堂を中華聖公会の総座堂とし、主教院主席（当時陳見真）の管轄とすることを決議した<sup>(23)</sup>。総座堂となるに伴い、抗日戦争の間修繕ができず傷みが進んでいた聖三一堂の修復工事が行われることになった<sup>(24)</sup>。しかし実際に修復するとすると、壊れた箇所が多かったため多額の資金が必要であり、上海市人民政府からの資金援助を得なければならなかった。しかし政府からの出資は必ずしもスムーズに進んだわけではなく、当時の状況を記載する『上海聖保羅堂通訊』によると、「中華聖公会総議会常務委員会による多数回にわたる交渉と連絡を経て」、やっと出資を得たというのが実際の状況であった<sup>(25)</sup>。結果的に政府から当時の金額にして 6 万円を得て<sup>(26)</sup>、1955 年 4 月 25 日から修復工事が始まり 9 月に終了した<sup>(27)</sup>。そしてその翌年の 1956 年 5 月 26 日に聖三一堂総座堂献堂礼拝が行われた<sup>(28)</sup>。このとき中国人聖公会信者たちはおそらく、聖三一堂が真に自分たち中国人に属するものとなったという実感を得たことだろう。

当時の聖三一堂修復における中華聖公会の積極的な姿勢からは、聖公会の全体運営を伝道団から引き継いだ中国人リーダーたちが、共産党政

権下でも聖公会として教会を引き続き発展させていくことができるという確信と展望を持っていたことが伺われる。しかしながらその展望はわずか2年あまりで潰えることになった。その要因となったのが全国のプロテスタント教会に大きな組織的変化をもたらした、現在における三自委員会下にある政府公認の教会のあり方の原型となった合同礼拝（中国語：連合礼拝）の実施である。

中国プロテスタントでは、1950年代半ばまでは現在みられるような政府公認の教会とそうでない教会との間の区分は明確化しておらず、教派もそのまま残っていた。しかしながら1950年代は中国社会全体、宗教界全体が社会主義社会建設のただなかで激動に直面していた時期であり、教会は朝鮮戦争によって高まった反帝国主義および愛国主義運動と、社会主義社会建設という社会的潮流に歩調を合わせることが求められていた。具体的には教会内での政治集会や、反動派・反革命と目される三自委員会傘下に加わらなかった教会などの伝道者たちへの糾弾・批判運動による排除を通じて、教会の分類と統合が実行された。この統合化の最終段階が1958年の合同礼拝の実施である。合同礼拝とは教派を廃止した上で複数の教会が合同で行う礼拝であり、実施に伴い教会堂の統廃合および聖職者の人員整理が行われた。

合同礼拝は全国で一斉に実施され、以下の二通りの仕方で教会の統廃合が行われた。第一の方法は特定の地区の中のすべての教会堂を教派の違いは関係なく一つに統合するという方法であり、第二の方法は特定の地区内において同じ教派の教会堂を統合するという方法であった。第二の方法が実施されたのは福建省と広東省のみであり<sup>(29)</sup>、上海では行政区ごとに1ないし3か所の教会堂のみが礼拝場所として指定され、当時208か所あった教会は22か所に絞られた。さらに文革が始まる前年の1965年には合同礼拝所は22か所から11か所にまで削減された。聖三一堂が位置していた黄浦区では沐恩堂と共に聖三一堂が合同礼拝所と

して残されたが、教派は廃止されたために<sup>(30)</sup>、合同礼拝の開始とともに聖公会は中国における歴史の幕を閉じたのである。しかしながら、聖三一堂が経ることになる変化はそれだけにはとどまらなかった。1966年から1976年までの文革における教会堂接収と破壊に直面することになるのである。

### 2-3. 文革における聖三一堂の接収

10年間におよんだ文革の間、宗教は徹底的な批判の対象となり、すべての宗教活動は停止され、宗教関連の施設は接収され工場や倉庫、学校などに転用された。それだけではなく、文革初期には宗教に関連するあらゆるものが紅衛兵による激しい攻撃の対象となり、宗教関連の施設や備品が破壊され、宗教関係者は激しい批判にさらされた。上海プロテスタントにおいて紅衛兵の主な攻撃対象となったのは黄浦区にある沐恩堂と聖三一堂であった。沐恩堂では紅衛兵たちによってオルガンや教会内の聖書、讚美歌集がすべてグラウンドに積み上げて燃やされ、さらに聖職者たちは殴られ、髪の毛をそられるといった暴力を受けた<sup>(31)</sup>。聖三一堂は黄浦区政府に接収されたが、沐恩堂と同様に帝国主義の象徴として紅衛兵による激しい破壊の対象になり、文革が始まってすぐに、聖三一堂内のパイプオルガンや大聖堂のシンボルである鐘楼が紅衛兵たちによって破壊された。

しかしそのような苦難の時もついに終わりを迎えた。文革終了後共産党政府は宗教活動の再開を認め、1979年初めには、宗教活動を管轄する行政機関である国務院宗教事務局も文革中停止していた機能を復活させた。それに合わせて三自委員会も徐々に活動を再開し、1980年2月には上海で文革後最初の全国大会を開催し、今後どのように教会運営を再開してゆくかという課題を話し合った。特に教会における教務をいかに回復するかが重要な課題であり、そのため三自委員会とは別に、教会

内の教務を指導する中国基督教協会が設立された。以降、両組織を「二つの会」という意味である「两会」と呼ぶようになり、三自委員会に加わる政府公認のプロテスタント教会では「指導部」といった意味合いで使用されるようになる。全国レベルの两会だけでなく、行政地域ごとに两会が置かれており、例えば上海市には上海市を管轄する两会がある。それらは略称として、全国レベルの两会は「全国两会（あるいは中国两会）」、上海市の两会は「上海（市）两会」と一般に呼ばれる。文革後も全国两会の本部は引き続き上海に置かれたため、上海市には全国两会と上海两会の本部がそれぞれ存在している。

公の場での宗教活動の再開は、文革中に閉鎖・接収されていた宗教活動場所が信者たちの手に戻されることによって進められた。その再開のプロセスは1970年代末から1980年代半ばごろまで段階的に進展していった。その間様々な問題、特に宗教組織の不動産の問題が浮上し、地方の宗教事務局による処理や手続きが必要であった。上海では1979年9月2日に黄浦区の沐恩堂が最初に活動を再開した。その後順次上海市内の教会堂が返還され活動を再開したが、当時教会堂は上海市の「中心市区（中国語：中心城区）」<sup>(32)</sup>と呼ばれる区内では一行政区に一か所に制限されており<sup>(33)</sup>、聖三一堂がある黄浦区ではすでに沐恩堂が再開していたため、聖三一堂は返還されることなく引き続き黄浦区政府によって大講堂および事務棟としての使用が継続された。

その後2004年までの長きにわたり、改革・開放政策によって都市が急変してゆく中でも聖三一堂は、ほとんど時が止まっているかのようにひっそりと都市の中に存在していた。筆者は2002年から2004年はじめにかけて上海において長期のフィールド調査を行っていたが、その当時聖三一堂は鐘楼を失ったまま高い門の向こうにわずかに建物の上部部分が見えるだけであり、そこがかつて教会堂であったとは、教えられなければわからない状態であった **【写真2 および写真3】**



【写真 2】 2004 年 1 月当時の聖三一堂入り口〔2004 年筆者撮影〕



【写真 3】 2004 年当時鐘楼はない〔2004 年筆者撮影〕



### 3. 都市開発と聖三一堂の復活

#### 3-1. 外灘源プロジェクトと聖三一堂の返還

文革が始まって後長きにわたり接収されたままであった聖三一堂は、2004年6月に黄浦区政府から全国両会に返還されることになった。この返還実現の背景は意外なものであり、黄浦区政府主導で始まったある商業開発プロジェクトが関わっていた。返還の経緯については、2016年11月に上海で出版された、元中国基督教協会会長および上海基督教教務委員会主席である曹聖潔による口述書である『曹聖潔口述史』に詳しいため、本書に基づきつつその経緯を紹介する<sup>(34)</sup>。

曹によれば聖三一堂の返還にいたるプロセスは、2000年前後に上海新黄浦集団による「外灘源」開発プロジェクトが始動したことに端を発する。それにより全国両会の本部が入っていた建物が開発対象となり、その建物からの移転を余儀なくされた<sup>(35)</sup>。開発対象となった北京東路から蘇州河東路までの円明園路を中心とした一画は、元英国領事館はじめ、YWCAビル（中国語：女青年会大楼）、中華協進会の事務所および1950年代以降は全国両会の本部が置かれていた協進ビル<sup>(36)</sup>（中国語：協進大楼）などが建ち並んでいた。つまりこの一画は、1920年代から30年代にかけて建てられた宗教・文化施設や外国人アパートが多く残る、租界時代の雰囲気の色濃く残した区域であった。

2002年以降、この区域は「外灘源」（筆者註：「外灘が始まった源である場所」という意味）と名付けられ、2003年初めに外灘源の保護と開発を目的とした黄浦区政府主導のプロジェクトが正式に始まった<sup>(37)</sup>。外灘源プロジェクトに携わる上海新黄浦集団は黄浦区地産局が内部に設立した民営開発会社である。このプロジェクトによって租界時代の、特に英国租界の面影を残した観光・商業区域として開発が始まり、そこに

ある建物およびそれらが並びたつ円明園路の改修・改築が進められた。それらの改修後の建物には各種商業・レジャー施設等が入ることになった。2004年にはアメリカのロックフェラー財団がプロジェクトの投資元になることが決まり<sup>(38)</sup>、現在ではこの地区はロックフェラーとバンドを合わせた「ロック・バンド（中国語：洛克・外灘源）」という名称で呼ばれている【写真4】。



【写真4】 円明園路沿いでの開発が進むロック・バンドの地図。  
〔2017年筆者撮影〕

ちなみに、外灘源のある地区にはイギリスの伝道団であるロンドン伝道会によって設立された新天安堂<sup>(39)</sup>があり、この教会堂も商業開発の一環として修復された。しかしこの教会堂は宗教施設として復活するのではなく、不定期に行われるイベントなどの際に会場として使用されている。

この外灘源プロジェクトの始動により上海新黄浦集団は、円明園路の協進ビルに本部事務所を置いていた全国両会に対して立ち退きおよび財産権の交換のための交渉を始めたが、曹曰く、それは「大変厄介な問題」

であった<sup>(40)</sup>。最初に黄浦区政府から提示された案は、保証金を出すので両会自ら移転先を見つけるようにという、やや不親切なものであった。そのため曹をはじめとする両会のメンバーはいくつかの不動産の購入あるいは賃貸を検討したが、条件に見合う場所を見つけることは極めて難しかった。その時両会のあるメンバーが、円明園路から近い九江路にある聖三一堂に敷設されている事務棟に移転できたら理想的ではないかと提案した<sup>(41)</sup>。

このアイディアは両会にとっては非常に魅力的なものであったが、曹の口述によれば、その交渉は必ずしも容易なものではなかった。聖三一堂およびその付設事務棟は黄浦区政府が財産権を所有し、当時もなお使用中であったためである。さらに黄浦区政府は、聖三一堂付設の事務棟を区人民大会常務委員会の事務棟にする計画をしており、すでに大金を投じて改修を始めていた。曹の口述では明確には書かれていないが、口述内容から読み取れることとして、黄浦区政府は移転が持ち上がった当初から両会本部の移転先の問題解決に対してあまり協力的ではなかったようである。そのため曹たち両会メンバーは、直接国および上海市に対して、彼らの事務所の需要と聖三一堂の歴史的由来を理由として、返還の要求を提出することにした。その試みは功を奏し、国家発展と改革委員会（中国語：国家発展和改革委員会）、中央統一戦線部、国家宗教局などの支持を得ることができ<sup>(42)</sup>、そこから事態が動き始めた。結果黄浦区政府は聖三一堂および敷設事務棟の財産権の全国両会への譲渡を受け入れ<sup>(43)</sup>、2004年6月6日に、両会は晴れて円明園路から九江路の聖三一堂への本部事務所の移転を実現した。

聖三一堂の返還の実現は、そもそも教会側あるいは宗教事務局による宗教活動をめぐる判断から実現したものではなく、黄浦区主導の商業地開発によって実現したという珍しい事例である。必ずしも宗教的な配慮から始まったものではないが、1981年から1996年まで全国両会の会

長をつとめ、中国プロテスタントの公認教会の指導者であった丁光訓は、聖三一堂の返還は、「政府の宗教自由の姿勢を示している」と人民日報の記者に語っており<sup>(44)</sup>、上海プロテスタント史の文脈から見ればこの出来事は大きな転換であったと言える。

### 3-2. 聖三一堂の修復と教会堂としての位置づけの問題

2004年に黄浦区政府から聖三一堂が返還されたのを機に、全国两会は、それまで黄浦区政府によって大講堂として使用されていた聖三一堂を教会堂に戻すための修復作業を行うことを決定した。資金は全国两会からの出資および全国各地域の两会からの寄付によって賄われた<sup>(45)</sup>。修復作業は2006年から開始され、文革中に破壊された鐘楼を含め、聖三一堂を元の姿に戻すべく大規模な工事が行われた【写真5】。特に礼拝堂内部は接収されていた間に大講堂および一部事務室として改築されていたため修復は困難を極めたが、2008年に基本的な修復作業は完了した<sup>(46)</sup>。

修復を経て聖三一堂は教会堂としての姿を復活させたが、一方で聖



【写真5】 修復中の聖三一堂〔2010年筆者撮影〕



【写真 6】再建された鐘楼〔2010 年筆者撮影〕

三一堂の宗教活動場所としての位置づけや使用をめぐるのは、今なおいくつかの問題が残されている。聖三一堂の全国两会への返還が決まった当初、宗教活動場所としての聖三一堂の位置づけに関しては様々な不確定要素があった。まず教会堂として使用するか否かという点は当初不確定であった。筆者が 2006 年に上海を訪れた際、当時上海市内の公認教会の副牧師をつとめていた H は、聖三一堂は教会堂として使用される予定だと話していた<sup>(47)</sup>。两会発行の教会機関紙である『天風』でも「修復後は教会堂での宗教活動を復活させることができ、収容可能人数は 1 千人あまりになる」と記載されていた<sup>(48)</sup>。

しかし、2017 年 9 月現在聖三一堂はいまだ教会堂として使用されてはいない。その背景には聖三一堂の帰属先の問題がある。前出の H は 2006 年当時、「聖三一堂は、今のところ全国两会に属することになるか、上海两会に属することになるかはっきり決まっていない」と筆者に話した<sup>(49)</sup>。そもそも聖三一堂と交換された円明園路の協進ビルは全国两会に

属するものであったため、聖三一堂の財産権は全国両会に帰属する。しかし仮に教会堂として聖三一堂で教会活動を行うのであれば、上海市内の教会活動を管轄するのは上海両会であるため、聖三一堂は上海両会に帰属する必要が出てくる。なぜなら、全国両会には地方において教会活動を管轄する権限がないためである。

しかしながら最終的に、聖三一堂の帰属先は上海両会ではなく全国両会に決まった。その結果聖三一堂は、上海両会の管轄下にある他の上海市内の他の教会堂とは異なる位置づけに置かれることとなり、実質的に教会活動は行われなくなることになったのである。礼拝のために使用されたのは唯一、2014年8月14日に行われた三自委員会の設立60周年を祝う礼拝の時のみである。この礼拝には全国各地の両会の代表、退職した聖職者、海外教会からの来賓、上海市内の教会の聖職者および信徒など600名が参加した<sup>(50)</sup>。

教会活動が行われただけではなく、教会堂は一般の信者や観光客に対して開かれておらず、国内外からの賓客が訪れた際に特別に教会堂内部に案内するのみである。聖三一堂への入り口である門は常に閉ざされ、聖三一堂の前には「修復中、立ち入り禁止」という立て看板が立っているが、ある教会関係者Uによれば、それは教会堂を開放しない口実だそうである<sup>(51)</sup>。

このように聖三一堂は、教会堂としての姿を取り戻しても、その機能は失われたままである。実際は教会堂として使用したいという希望は、聖職者や信者の間にも強くある。しかしそれが実現しない背景には複雑な理由がある。その主な理由として前出のUは、筆者によるインタビューの際に以下の理由を挙げた。①全国両会に属している、②聖三一堂がある黄浦区にはすでに4つの教会堂（沐恩堂、清心堂、諸聖堂、恵中堂）があり、教会として活動を再開しても信者が集まらない可能性がある、③修復にあたっては元来の聖公会の伝統を尊重し、その外観も内



装も英国聖公会の様式に従って改修を行ったため、もし礼拝を実施するならば礼拝形式を聖公会のスタイルにするかあるいは他の教会堂と同様に無教派にするかという選択肢があり、決定が難しい<sup>(52)</sup>。

①と②の理由は従来の宗教政策の枠組みで見れば十分に納得のいくものである。しかし③の教派をめぐる理由は、1958年における合同礼拝の実施以降、中国国内の公認教会は無教派であることが基本であると認識してきた筆者にとってはかなり意外で新しい状況であった。たとえ実現の可能性は低いにせよそのような計画が検討されているという点に、指導部における教派をめぐる姿勢の柔軟化の兆しが見受けられると言えよう。

## おわりに

聖三一堂は上海に存在したプロテスタントの教会堂の中でも、最もイギリスおよび植民地主義との関わりが深い教会堂であった。中華人民共和国建国後初めて真に中国人の教会堂となるが、1958年には聖公会そのものがなくなっただけでなく、文革中は激しい破壊の対象となり、教会堂のシンボルであった鐘楼は失われてしまった。その後は長きにわたり聖三一堂は激変してゆく都市の中で眠り続けることになった。

2000年代に入ってから聖三一堂の復活は、その歴史的経緯を鑑みれば非常に大きな変化であった。さらにそれが、宗教をめぐる政治的判断による変化ではなく、政府主導による都市開発プロジェクトというまさに現代上海を象徴する文脈の中で実現したという点において、極めて珍しい事例でもある。

現在のところ聖三一堂が実質的な宗教活動場所として日常的に利用される見込みは少ないが、中国における宗教状況の変化の速さを鑑みれば、聖三一堂が一般開放される、あるいは教会堂として教会活動が行われる

ようになる日が予想以上に早く訪れる可能性もある。聖三一堂をめぐる状況は、中国における宗教状況に関わる要素の多様化の事例として、今後も引き続き注目する必要がある。

## 注

- (1) 上海での租界の形成は1845年にイギリスによって始まった。1863年には、イギリスとアメリカの租界が合併し共同租界となり、1899年にはその総面積は約21万4千アール(2140ヘクタール)に達した。またフランス租界は1849年に上海县城(租界以前からの上海県の中心市街地)とイギリス租界の間に設置されたのを起点に、西南方向へと拡張し、その総面積は約1万6千200アール(162ヘクタール)であった。
- (2) 土地はデント商会(Dent & Co.)のビール(Thomas Chaye Beale)がわずかな価格で提供した〔ポット, ハックス(帆足計・濱谷満雄訳)『上海の歴史—上海租界発達史』, 白揚社, 1940年, 123-127頁〕。
- (3) 葛壮『宗教和近代上海社会的变迁』, 上海書店出版社, 1999年, 25頁。
- (4) 設計はイギリスで多数の教会建築に携わったサー・ジョージ・ギルバート・スコット(Sir George Gilbert Scott)によるものであったが、予算の関係により当時上海在住で租界内の数々の建築に携わっていたウィリアム・キドナー(William Kidner)により改案された。
- (5) 姚民権『上海基督教史』, 上海市基督教三自愛国運動委員会・上海市基督教教务委員会, 1994年, 14-15頁。
- (6) 『天風』2007年4月(下半月版), 表紙裏部分。中華聖公会総議会出版の『聖工』第4期, 1955年における聖三一堂の修復についての記事が転載されている。
- (7) 上海市檔案館信息网: [http://www.archives.sh.cn/shjy/scbq/201301/t20130107\\_37692.html](http://www.archives.sh.cn/shjy/scbq/201301/t20130107_37692.html), 2016年12月1日閲覧。
- (8) 『中華聖公会報上海聖保羅堂自立二十周年紀念刊』, 1929年, 1-4頁。
- (9) 例えば神学者, 教育家である趙紫宸や, 中華聖公会主教であり三自委員会主

## 上海聖三一堂の歴史の変遷

席を務めた丁光訓など。

- (10) この頃の教会運動について詳しくは、〔山本澄子『中国プロテスタント史研究』、東京大学出版会、1972年およびDaniel Bays, *A New History of Christianity in China*. Wiley-Blackwell, 2012, pp.107-113〕を参照。
- (11) 中華基督教協進会および中華基督教教会について詳しくは〔山本澄子前掲書、53-68頁〕参照。
- (12) 『上海宗教志』 編纂委員会『上海宗教志』、上海社会科学院出版社、2001年、450頁。
- (13) 『天風』、2007年4月（下半月版）、表紙裏部分。
- (14) 同上。
- (15) 1925年に閘北地区に完全に中国人のみの資金による教会堂を開設〔『中華聖公会報上海聖保羅堂自立二十周年紀念刊』、1929年〕。
- (16) 1918年に虹口地区に上海で初めて中国人のみの資金による教会堂を開設〔姚民権前掲書、1994年、174頁〕。
- (17) この状況について詳しくは〔村上志保「上海におけるプロテスタントの変容と教会堂——一九二〇年代と一九五〇年代を中心に——』『中国—社会と文化』第二十二号、中国社会文化学会、2007年、165-182頁〕参照。
- (18) 建国前後の上海における宗教状況とプロテスタント教会の動きについては、〔石川照子「宗教政策と都市社会の変容——建国前後のキリスト教界を中心に」』『建国前後の上海』、日本上海史研究会編、2009年、373-403頁〕参照。
- (19) 『上海宗教志』、編纂委員会前掲書、435頁。
- (20) 同上。
- (21) 例えば王明道など。詳しくは〔松谷曄介「中華人民共和国におけるキリスト教——一九四九年から現在まで」』『アジアキリスト教史叢書3 はじめての中国キリスト教史』、石川照子他、かんよう出版、2016年、192-217頁〕参照。
- (22) Xu, “ ‘Patriotic’ Protestants: The Making of an Official Church.” in Kindopp, Jason, and Hamrin, Carol Lee. (eds.). *God and Caesar in*

*China: Policy Implications of Church State Tensions.* Washington D. C.:  
Brooking Institution Press. 2009, pp.107-121.

- (23) 『上海聖保羅堂通訊』 20号, 1956年6月, 1頁。
- (24) 聖三一堂の改修工事は徐永昌營造が請負い, 聖堂の東, 南, 北側にある三面の空き地の緑化は, 朱興記花園が請負った〔『上海聖保羅堂通訊』 19号, 1956年4月, 1頁〕。
- (25) 『上海聖保羅堂通訊』 16号, 1955年10月, 1頁。
- (26) 『上海宗教志』 編纂委員会編, 前掲書, 435頁。
- (27) 『上海聖保羅堂通訊』 16号, 1955年10月, 1頁。
- (28) 『上海聖保羅堂通訊』 20号, 1956年6月, 1頁。
- (29) 赤耐主編『当代中国的宗教政策 下』, 当代中国出版社, 1999年, 245頁。
- (30) ただし, 合同礼拝によって三自委員会に属する教会は完全に教派的伝統を失ったわけではない。現在もなお上海市内のいくつかの教会堂では, かつてその教会堂が所属していた教派の習慣を部分的に残している。さらに以前の教派の教義や習慣にこだわる信者のために, 特定の教派に特有な習慣(例えば安息日礼拝など)を教会内の活動で実施する教会も存在しており, 三自下にある教会が完全に無教派であるとするのは正しくない。
- (31) 曹聖潔・羅偉虹前掲書, 98頁。
- (32) 上海市では中心市区と郊外区(中国語:「郊区」)とに分かれている。2017年現在市区にあたるのは黄浦区, 徐匯区, 長寧区, 普陀区, 静安区, 虹口区, 楊浦区である。
- (33) 1980年代以降上海中心市区では一行政区に設置できる教会堂は一か所のみという制限があったが, その後急増する信者数に対して圧倒的に空間が不足するようになったため, 1980年代末には, 空間不足を補う方法として副教会堂(中国語:副堂)が設置されるようになった。また行政区の統合に伴い, 一行政区に複数の教会堂がある例(黄浦区など)もある。
- (34) 曹聖潔は1931年生まれ。長年上海および全国における公認教会の指導部に

## 上海聖三一堂の歴史的変遷

いた人物で、中国基督教協会会長や上海基督教教務委員会主席を務めるなど、特に教務において長年指導的立場にいた人物である。

- (35) 曹聖潔・羅偉虹前掲書, 232 頁。
- (36) 協進ビルはアメリカの長老会員およびロックフェラー基金委員会からの資金によって1925年竣工。全国基督教協進会の事務所など教会関係の組織が使用していた。その後1950年代半ばから2004年まで全国两会の事務所（中国基督教協会は1980年から）が置かれた。
- (37) 楊嘉祐『外灘・源』, 上海人民出版社, 2012年, 5頁。
- (38) 同上。
- (39) 新天安堂はロンドン伝道会によって、イギリス聖公会以外の教派に属するイギリス人など外国籍の信者のために建てられた教会堂である。中国人信者は受け入れていなかったという点において聖三一堂に類似している。
- (40) 曹聖潔・羅偉虹前掲書, 233 頁。
- (41) 同上。
- (42) 当時国家宗教局が国レベルの宗教団体の事務条件を改善しようという計画を持っていたことが彼らの要求への支持へとつながった〔曹聖潔・羅偉虹前掲書, 234 頁。〕。
- (43) 曹聖潔・羅偉虹前掲書, 234 頁。
- (44) People's Daily Online, 2004年6月9日の記事。(http://en.people.cn/index.html, 2004年8月1日閲覧)
- (45) 曹聖潔・羅偉虹前掲書, 235 頁, および2017年3月, 上海市内でのUへのインタビューより。
- (46) 曹聖潔・羅偉虹前掲書, 235 頁。
- (47) 2006年10月, 上海市内でのHとの会話より。
- (48) 『天風』, 2007年第308期, 裏表紙部分。
- (49) 2006年10月, 上海市内でのHとの会話より。
- (50) 中国基督教網站 : http://http://www.ccctspm.org, 2014年8月31日閲覧。

(51) 2017年3月, 上海市内でのUへのインタビューより。

(52) 同上。